

学 会 記 事

第15回徳島医学会賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなりました。年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各期ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名に贈られます。

第15回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定いたしました。受賞者の方々には第232回徳島医学会学術集会（冬期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金10万円及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は本号185～194ページに掲載しています。

（大学関係者）



氏 名：森島真幸 もりしま まさき
 生 年 月 日：昭和52年9月28日
 出 身 大 学：四国大学生生活科学部
 管理栄養士養成課程
 所 属：徳島大学大学院ヘル
 スパイオサイエンス
 研究部医療栄養科学
 講座代謝栄養学分野

研 究 内 容：自発的高運動性モデルラット SPORTS の海馬では monoamine oxidase A 活性が低下している

受賞にあたり：

このたびは、第15回徳島医学会賞に選考していただき、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は、回転カゴ運動において自発的に長距離走行をする SPORTS ラット（Spontaneously-Running-Tokushima-Shikoku；SPORTS, Wistar 系）を用いて研究を行っています。この SPORTS ラットは市販の Wistar 系ラットに比べ、6～10倍の自発運動を行います。近年、現代人の運動不足は深刻な社会問題となっておりますが、その主要な原因は運動に対する欲求の低下であると考えられます。SPORTS ラットは運動に対するモチベーションが高く、その制御中枢である脳における分子基盤の解明

は新しい運動不足予防法の開発に貢献できるものと期待されます。現在、SPORTS ラット脳（海馬）ではモノアミンの代謝分解酵素である monoamine oxidase A の活性が低く、これによる細胞外モノアミンとくにノルエピネフリンの増加が高い運動習慣を規定しているのではないかと研究成果が得られております。しかし、動物の情動、行動は脳内の複雑な分子ネットワークにより成り立っておりますので、未だ、『SPORTS ラットはなぜ運動を好みよく走るのか』という大きな研究のスタート地点に立ったに過ぎません。

今回の受賞を励みに、今後も SPORTS ラットの高い運動習慣を規定する脳内分子基盤の解明に向けて、さらなる努力を続けていく所存です。最後になりましたが、本研究を進めるにあたって御指導、御助言を頂きました代謝栄養学分野の中屋豊教授、ならびに諸先生方、さらに SPORTS ラットを見い出され、当研究室にご提供いただいた四国大学生生活科学部の久岡文子教授、篠宮幸子先生に心より感謝申し上げます。

（医師会関係者）



氏 名：三谷裕昭 みたにひろあき
 生 年 月 日：昭和21年10月31日
 出 身 大 学：徳島大学医学部
 所 属：三谷内科
 研 究 内 容：内科一般、甲状腺
 および糖尿病代謝

受賞にあたり：

この度、第15回徳島医学会賞に選考して頂き、先生方ならびに関係各位の皆様に厚く御礼申し上げます。

昨年も県南地域で「伝染性紅斑」が小流行していましたが、小児より母親への感染でその母親は著明な多発性関節痛と自己抗体陽性の1例を経験し、最初、自己免疫疾患を考えましたが、家族歴よりヒトパルボウイルス IgM/IgG 抗体も同時に検索し、同ウイルスによる急性関節炎と診断しました。ANA 陽性は合併と推察していました。

平成17年2月、上記症例と同年代で家族歴を有する軽度の手関節炎と顔面浮腫を主訴とする患者が来院し、RA とウイルス検査を施行し IgM/IgG 抗体陽性で今回の症例1となりました。ところが、同週に全身浮腫、息切れ、

軽度の低 SO₂ 血症を呈する 2 例目が受診し、X-P, ECG, その他の一般臨床検査、BNP, CH₅₀, ANA などとを検査しました。臨床症状を有するため、成人同ウイルス感染症による急性心不全の合併を考えましたが、尿蛋白、潜血陽性、顆粒円柱陽性で急性腎炎も否定できませんでした。しかし、腎機能正常のため、利尿剤投与のみで経過観察をしました。

感染源は孫の保育所と考えられ、その母親（31歳）のウイルス IgM/IgG 抗体は陰性でした。その後、2～3週間に、症例 3～5 が来院し、同ウイルスによる心不全と診断しましたが、まだ、詳細な病因や合併症の知識もなかったため、網状赤血球の減少は検索できませんでした。

た。

そこで、約 1 ヶ月、全例に再来していただき、再検査したつもりでしたが、やはり不十分でした。本邦での心不全の報告は 1 論文ありましたが、外国での報告は多く、その合併症も多彩で、心筋症、胎児水腫、赤芽球系貧血、腎炎、膠原病など、伝染性紅斑流行期には内科的にも、とくに、妊娠可能な母親は子供よりの感染の機会が多く、保健環境上注意を要するものと考えられました。

今回の受賞を励みとし、流行期の諸種臨床症状に注意し、さらに検討を重ねて行きたいと思います。最後に、本症例研究に御協力いただいた馬原文彦博士、澤田誠三博士および塩野義製薬の各位に深謝いたします。